

第 6 2 8 回 放送番組審議会

議事録

2026年4月21日（火）



第 6 2 8 回 放送番組審議会

1. 日 時 2026年4月21日(火) 午後1時30分

2. 開催場所 テレビ岩手6階 大会議室

3. 委員総数 9名

出席委員 7名

委員 長 岩館 めぐみ

委員 中野 美知子

委員 岡安 大地

委員 大森 健史

委員 保 和衛

委員 千葉 幸子

委員 渡邊 里沙

欠席委員 2名

副委員長 菅原 和宏

委員 立花 工

社側出席者

福士 千恵子 代表取締役社長

池田 学 専務取締役経営企画局長

小形 恵一 取締役報道制作局長

三浦 裕紀 報道制作局報道部長

事務局

桑島 広実 (執行役員編成局長)

4. 議 題

1. 3/11 (水) 16:45~17:43 「5きげんテレビ」
18:15~18:54 「ニュースプラス1いわて」

2. その他

5. 資 料 (資料として以下のものを配布)

- ・視聴者からのご意見
- ・2025年10月期 番組種別放送時間報告

6. 意見

【委員側意見】

○4カ所の定点観測の映像は、テレビだからできる事だと感じた。そこに暮らす何万人という人たちの15年間で、短い時間の中でもしっかりと伝えていた。映像の中に空き地が目立つことは現地に様々な課題があることを感じさせ、現実を知る機会にもなった。

○冒頭のインタビューを見て、15年経ったからこそ震災の経験を話すことができる人たちがいるのだなと思った。元気配達人の企画は、触れ合った人が少なくて残念だった。車避難のシミュレーションは詳しくてわかりやすく、考えさせられた。

○定点観測の映像は、1コマ1コマが短く感じ、映像がスポンサー表示の背景になっていたりして、もっとしっかり見たいという思いが残った。盛岡市内のキャンドルの映像について、内陸の人たちも沿岸の人たちとつながっているという思いを伝えるのであれば、もう少し深く取材して紹介するほうが良かったのではないかと感じた。

○災禍を繰り返さないために教訓の風化防止は大切であるが、努力を強いられる勉強というやり方はハードルが高い一方で、自宅で気軽に視聴できるテレビ番組は、教訓を風化させない手段として大きな役目をはたしているのではないかと感じた。

○東日本大震災から15年、3月11日への向き合い方は人それぞれなのだ改めて感じさせる良い番組だった。旅館の女将さんの、すがすがしく前を向いた表情は、インタビューをした藤井貴彦アナウンサーが引き出したのだと感じた。番組最後のコメントでアナウンサーが「寄り添い伝え続けていきます」と語った決意が印象的だった。その言葉通りの番組作りをこれからも期待したい。

○当日のインタビューで、話してくれる人、話してくれない人がいる中で、インタビュアーの誘導尋問のように感じてしまう場面があった。引き出した言葉が、この番組に本当に必要なのか疑問を感じた。東日本大震災から15年、内陸部で起きたことも記憶が薄れてきているので、今後の番組でテーマにしてもよいのでは。

○2番組共通で、出演者と番組のテイストが一貫していてよかった。番組冒頭から各地でたくさんの方々のインタビューがあったが、インタビュアーの気づかいや誠実さが、取材を受けた方が抱えている様々な感情を引き出していた。津波の映像でショッキングとを感じるものもあったが、映像が伝えるものはやはり大きいと思った。

【局側意見】

- 「5 きげんテレビ」と「ニュースプラス1いわて」の相互の特色を生かした3月11日の番組は今回が3回目となる。番組のVTRを編集する中で、取材をさせていただいた方々のコメントに「未来に向けた言葉」が多いことを感じ、テーマを「未来へ」とした。
- 未来に向けて、番組を見た方が防災について考えるきっかけとなったり、コメントで元気づけられたり、気を引き締めたり、そのようなことにつながってほしいという番組制作の意図もあった。
- 東日本大震災から15年、様々な人たちの現在地を正確に描く事で、被災地の現実を伝えようという狙いがあった。
- 定点の映像の1コマ1コマが短いという指摘については、今後改善していきたい。
- 東日本大震災での、内陸部の被害や記憶や教訓が薄れているということについて、次につながる防災意識を高めていく番組にも取り組んでいかなければならないと感じた。
- これからも被災地に寄り添って伝え続けていくことに努めたい。

7. 審議機関の答申または意見の概要公表の方法及び年月日

- ①自社放送 4月30日(木) 11:25~11:30「あなたと歩むテレビ岩手」
- ②テレビ岩手本社での据え置き